

チンゲンサイ（ハウス周年）

栽培暦

月 作型	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	1
ハウス周年		—	—	□									

栽培の特徴とポイント

発芽適温は 20～25 で、適温下では 3 日位で発芽する。ハウスを利用し周年栽培が可能である。冬場は、抽だい等の抑制から、2 重被覆等の保温対策が必要で、高温期には乾燥や、病害虫対策が必要である。

品 種

夏賞味 : 生育はやや遅いが強健、6～7月の梅雨期の栽培や盛夏期の栽培でも節間伸長が少なく、(武蔵野) 上物が収穫できる。草姿は立性で、葉数多くボリューム感がある。抽だいがやや早いので 11～5月下旬の播種には適さない。

冬賞味 : 晩抽性で、低温下でも生育が良いので、冬から春の栽培に最も適している。草姿は立性で (武蔵野) 株元の張りが良く、葉色濃くつやがある。

その他、青帝、武帝(サタ)等がある。

育苗管理

播種時期によっては直播きも可能であるがほ場の効率的利用や栽培の安定のため、移植栽培が一般的である。

1 播種

セルトレイ 200～288 穴に市販の培養土を使用し育苗する。1 アール当たり 2000～3000 粒のコーティング種子を準備し、播種板を使用して、1 穴 1 粒まきとする。

2 育苗管理

セルトレイを地面の間に隙間があるように置き、苗の徒長を抑え、根鉢の形成を促進する。適温下では 3～5 日で発芽するが、10 以下では 7 日以上を要し不揃いとなるのでトンネル被覆等によって保温が必要である。

育苗日数は、春秋期 20～25 日、夏期 14～18 日、冬期 30～35 日程度を目安とする。

本ば管理

1 ほ場準備

土壌は幅広く適応するが、根が細かく深く張るので、耕土の深い肥沃なほ場を選ぶ。連作の影響を軽減するため収穫残さを取り除き、塩類除去とともに有機物資材を充分施用し土作りを図る。

施肥例（10a 当り）

	施肥量	窒素	リン酸	加里
完熟堆肥	1 t			
苦土石灰	140kg			
有機みのる君	150kg	12.0	12.0	12.0

2 施肥

肥料は基肥中心で、施肥量は3要素で1 a 当たり1～1.5kgとする。低温期はやや多く、高温期は少なめに施用する。

また、連作回数や生育により施肥量を加減する。

3 定植

定植苗は、本葉2～3枚、育苗日数は12～20日で、定植は遅れず行う。各条毎に苗の大きさを揃え、浅めに植付ける。汚れ防止と乾燥防止のためマルチングを行なう。市販の穴あきマルチを利用すると作業性がよい。夏の高温時は白黒ダブルマルチを用い地温の上昇を防止する。

栽植密度は、畝幅140cm×条間15cm×株間15cm前後とするが、夏場は節間伸長が起こりやすいため条間20cm、株間15～18cmと栽植密度を広くする。

4 定植後の管理

1) 温度管理

温度は25℃前後を目安とし、換気・開放状態とする。冬期は夜間5℃を割らないようにトンネルやべた掛け資材を利用し保温に努める。

2) かん水

活着までは充分量をこまめにかん水し、根張りを良くする。かけすぎは根傷みを起こすので、活着後は乾いたらかけるようにする。夏場は乾燥により葉縁の褐変が発生しやすいので注意する。

病害虫防除

害虫はコナガ、キスジノミハムシ、冬はナメクジ等が発生する。

早期発見、早期防除が基本であるが、防虫ネットを併用すれば更に効果は高い。

病害は白さび病や軟腐病が発生する。ハウス内の換気に努める。また根こぶ病に対しては、被害残さの撤去や、石灰を施用し土壌の酸度を矯正する。

収穫・調製

草丈20cm、1株100g以上を目安とし、適期収穫に心がけ取り遅れのないように注意する。定植から収穫までのおよその日数は春30～35日、夏30日、秋30～40日、冬50～60日となる。気温の高い期間（5月～10月）は収穫後の品質低下が著しいので朝穫りとし、涼しいところに置くか保冷库（5℃）で予冷する。

販売のポイント

朝穫りの実施など、鮮度を活かした差別化販売を実施する。

有機質肥料を中心とした栽培等による差別化販売を実施する。